

看護研究

部会長

徳島大学医学部

松家 豊

52年度の看護研究は課題の増加とともに内容もより充実したものであった。以下、主要項目別に研究成果をまとめた。

看護記録

八雲病院（佐藤ほか）はPOS導入を前年度にひきつづき実施し、患者中心の総合的診療に役立てた。問題リスト用紙を作製し各専門職員による問題点の指摘と評価方法およびその対策を樹立した。また、月別管理表を作り調和のとれた療育の向上をはかった。

南九州病院（赤塚ほか）は看護計画を立てるにあたり十分な観察とその記録性が極めて重要であることを強調し、症例を提示し看護記録を通して上、中、下位目標を定め内容の充実した看護計画を立案した。

西奈良病院（酒井ほか）はカードックス法の活用について改良を加えチームワークの向上につとめた。

これら看護記録に関しては施設によるちがいはあるができれば今後全国的な統一性がのぞまれる。

心理的看護

東埼玉病院（工藤ほか）は中学生の精神的成長にともなう思春期の行動、心理の変化に対応することの重要性とその具体的対策について患者への接し方の検討を行った。

新潟療養所（五十嵐ほか）は症状の進行にともなう情緒変化について、歩行、ADL、学校、病棟生活との関連をとりあげ今後の援助のあり方について問題を提起した。

長良病院（郷津）は死に直面した患者の心理について調査分析した。他人の死のうけとめ方、自分の将来に対する内面的問題をとらえ職員と患児とのふれあいの必要性を強調した。

これら心理面の看護については患者とともに職員間にも悩みが絶えない。貴重な経験を通した研究に取り組んでいるのが現状でたゆまぬ努力がつけられている。

生活指導の介助

西別府病院（石川ほか）は高校卒業の32人を対象に生活の一環である作業療法の実状を報告し運営上の問題点と援助の心構えについてのべた。

箱根病院（山口ほか）は成人の自動車運転についての身体的、心理的面からの追跡を行いよい結果を得ている。

東埼玉病院（岩崎ほか）は先天性筋ジ、脊柱変形を合併した患者、重症者などの生活介助について症例検討を行いADLの指導や自立への援助についての具体的方法を提示した。

岩木療養所（七戸ほか）は夜間のおやつを実施し、その時間、材量、労作、経費等を検討し栄養学的、心理的に十分な効果がみられた。

看護介助

川棚病院（辻ほか）は体位交換の介助回数の減少のためにビーチボールを使用し効果をあげている。

西多賀病院（天野ほか）は体位交換の問題について患児の体位交換の実状を詳細に調査しその分析を行った。不安定を利用した運動方法、屈筋優位の姿勢を指摘し安楽な体位とはこれらの条件を生かすことによって有利にみちびかれるものであることを説明した。

東埼玉病院（大野ほか）は排便姿勢についてベッド上での排便の工夫、介助としてゴム便器使用、半坐位姿勢、起床時食塩水飲用などを行い習慣の改善につとめ排便介助の軽減と患者の安楽性を考えた。

刀根山病院（大久保ほか）は入浴介助に関してボディメカニクスの応用を映画をもって説明し啓蒙に役立てた。

これら生活指導や介助、体位の問題については日常看護にたずさわり重大な関心事である、実状に即した合理的方法の解明に多大の努力がはらわれていることがうかがえる。

合併症の看護

南九州病院（久保ほか）は頑癬についてその発生原因を追求し、生活環境の改善や洗滌処理の効果が大きいことをみとめた。

西多賀病院（石井ほか）は車椅子患者によくみられる殿部痛の原因となる皮膚病変（毛の炎毛のう角化症）に対して坐布団（ボンマット）、薬剤、移動、臥床などの方法で改善がみられた。

東埼玉病院（成富ほか）は凍傷の処理として長時間の保温（温熱）的処理が有効であったと報告した。

末期看護ケア

西多賀病院（昆ほか）は62名の死亡患者のうち15才以下の18名について死亡前1ヶ年間の症状生活状況などの看護記録を検討した。

臨床症状として脈拍異常、胃腸症状、胸部圧迫感、胸痛などが1年以前からみられたことに注目を示した。感染の予防もまた重要であった。しかし、患者は比較的明るい感じの日常生活を送っていた。死期直前の問題にもふれている。これらは末期看護ケアについて重要な示唆を与えるものであり、長年月にわたっての筋ジ看護から生れたものである。

西別府病院（百武ほか）は末期急変時の看護処置についてその手順を作成した。これも貴重な経験の上に確立されたものである。心肺蘇生法を含めた救急処置は生命の延長につながるものである。

検脈, 検温

鈴鹿病院（松井ほか）は末期によくみられる不整脈を適確に把握するために検脈について検討を行った。実験的結果は心不全症状の発見に警告を与えるものである。即ち、60秒間測定値、午前6時実施が不整脈を早くとらえる手段であることを明らかにした。

東埼玉病院（大野ほか）は検温についての全国調査を行った。1日1回午前6時実施の施設が大多数を占めていた。1回検温は弊害があるので障害度や症状にあわせた実施をすすめている。

看護機械, 器具

西別府病院（横枕ほか）は陰部湿疹の処置としてベッド上での洗滌装置を考案した。自動車タイヤチューブとタイヤを用いて作った。

8日間で治療するよい結果を得た。また、坐位時の下肢すべり止めとして食卓用すべり止めマットを利用した。

刀根山病院（大久保ほか）は排泄用の用具の工夫を行った。ズボンのファスナーの改良、陰茎押え、尿器受けなどを試作した。

南九州病院（吉永ほか）は便器車の改良を試み、安楽性、プライバシー、介助軽減などに役立った。

東埼玉病院（成富ほか）は移動式足踏み台の試作、ウオータベッドの効用をのべたがなお普及については多少の問題がある。

徳島療養所（久次米ほか）は車椅子ヘッドレストの改良、安全ベルトの試作を行った。

兵庫中央病院（大谷）は電動車椅子の坐位姿勢をよくするための躯幹か頭部の支持装置を試作しよい姿勢や肺機能の維持につとめた。

東埼玉病院（大野ほか）は電動車椅子の走行距離、疲労、管理のしかたをのべた。

鈴鹿病院（山中ほか）はテラー式体幹装具を脊柱変形に用いたが不成功に終わった。

宇多野病院（広川ほか）は肩かけ式の安全ベルトを試作した。

医王園（山中ほか）は登校用の上衣改良を行った。冬季介助の便をはかった。

原病院（岡田ほか）は調節式オーバーテーブルの改良試作を行った。

これら機器は処置、ADL、変形予防、などの療育看護に密着したものであり極めて実際的なものである。年毎に新しいアイデアが生れその積み重ねは患者や介助者に高く評価されている。重病者に対する看護のむづかしさを様々に反映しているものが多く今後とも工夫と広い活用が大切である。

看護管理

刀根山病院（大久保ほか）は短期入院患者の退院後の追跡を行った。その結果家庭に帰ると着衣動作など不能になるケースがあり、排泄も介助に逆もどりし、装具歩行にも困難性があるなどを指摘した。これは時間とか同情的介助が原因であるとして自立性の向上に対して家庭での問題を投じた。就学状況はうまくいっている。在宅ケアの今後のあり方について多くの示唆を与えた。

また、39年に開設され長い経験と研究のもとに看護手順を作成し全国に参考資料として提供した。

徳島療養所（坂本ほか）は病棟の環境衛生学的調査を年間にわたり実施し、病室内の気象条件

落下細菌、照度、騒音など環境改善と感染予防に対する基礎的研究を行った。

再春荘（藤岡ほか）はおしぼりの清潔性をしらべハイアミン消毒の有効なことを指摘し感染予防に対し看護面からの協力を行った。

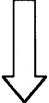
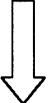
下志津病院（大塚ほか）は成人対策として病棟間の傾斜配置についてその功罪を検討した。

東埼玉病院（大野）はディケアの実際について成人を対象とした特殊外来部門の運営方法を具体的に示し報告した。

新瀉療養所（井沢ほか）は女子患者管理のためトイレ、入浴、衣服などについて検討した。

このように成人患者の看護、在宅ケア、通院ケアなど従来の施設ケアから新しい要請に対する医療看護についての方向づけが着々と行われつつある現状のもとで新しい研究が生れつつあることはたのもしい限りである。

以上、多岐にわたる看護研究は多忙な看護業務の中で行われたものであり、それぞれに伝統ある看護部門での活躍ぶりがうかがわれる。すでに10年余の経験は初期の試行錯誤を脱し施設毎のユニークな歩みを示すものである。なお、今後における幾多の問題点をも提示している。しかしその一つ一つは患者の幸せを中心とした看護面からの解決策であり、大きな流れとなって時代の医療の先端をとりいれ筋ジ特殊性のなかに生かされている。これらの研究がつねに患者に直結しまた介助者へも裨益している。

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

52 年度の看護研究は課題の増加とともに内容もより充実したものであった。
以下、主要項目別に研究成果をまとめた。

看護記録

八雲病院(佐藤ほか)は POS 導入を前年度にひきつづき実施し、患者中心の総合的診療に役立てた。問題リスト用紙を作製し各専門職員による問題点の指摘と評価方法およびその対策を樹立した。また、月別管理表を作り調和のとれた療育の向上をはかった。

南九州病院(赤塚ほか)は看護計画を立てるにあたり十分な観察とその記録性が極めて重要であることを強調し、症例を提示し看護記録を通して上、中、下位目標を定め内容の充実した看護計画を立案した。

西奈良病院(酒井ほか)はカードックス法の活用について改良を加えチームワークの向上につとめた。

これら看護記録に関しては施設によるちがいはあるができれば今後全国的な統一性がのぞまれる。